

教職員が素晴らしい人生をおくるために



立命館中学校・高等学校

はじめに

白井有紀
中野喬介
原澤研二
田中京平

立命館中学校・高等学校は 2025年に創立 120 周年を迎えます。長い歴史の中で、北大路、深草、そして長岡京へと校舎を移転してきました。そして、校舎は変われども、建学の精神である「自由と清新」に込められた全人教育は、変わることなく継承し続けてきました。また同時に、生徒と教職員は、立命館の教学理念である「平和と民主主義」を自分たちのフィロソフィとして大切にしながら、学校づくりを行ってきました。先輩の先生方から語りつがれてきた伝統が、今も学校の中に様々な形で存在しています（1949年から毎月実施され続けている、高校生徒会執行部と学校教職員の話し合いの場である「学内協議会」などは、その一例です）。

更に近年は「グローバルな視点を持って新しい時代を切り拓き、未来に貢献する人を育てる教育」を標榜し、変化の激しい社会の中にあっても、国内外を問わず多様な場で活躍する卒業生を輩出し続けています。

様々な場で活躍する数多のOB・OGや、1911年に発足し総会員数3万5千人を超える同窓会組織である「清和会」の存在が、伝統校たる本校の重層的な厚みと誇りを生み出しているのです。

立命館中学校・高等学校の教育理念は、言語化されたものと、伝統や慣習として言語化されていないものが共存しています。教員も生徒も、更には学校組織そのものも、一筋縄ではいかない個性を有しているため、新しく赴任された先生方にとっては、慣れ親しむのに少しばかり時間のかかる職場であることもまた事実です。そのような先生方のために、何か道標になるフィロソフィがあれば、より立命館の伝統と教育理念を理解していただけるのではないかと考えました。

私たち教職員は、様々な場面で、悩んだり、葛藤したり、行き詰まったりすることがあります。そんな時こそ、本校の教育の原点に立ち戻り、自分たちの教育方針を省みる必要があります。立命館中学校・高等学校のエントランスには、立命館学園総長・末川博先生のお言葉が刻まれたレリーフがあります。教職員も生徒も毎朝このレリーフの前を歩いて学校に入ります。今回フィロソフィ作成に際して、馴染み深い末川先生のいくつかのお言葉を引用させていただきました。また、よい教育実践のためには、教職員が元気であること、大きく言えば「教職員が素晴らしい人生を送ること」が大切であると考え、それをそのままタイトルとして掲げました。「フィロソフィ」と呼べるほどのものではないかもしれませんが、時に教職員として必要なものを確認したり、何かに行き詰ったときや悩んだときにでも一読していただくと幸いです。

1. 理想は高く、姿勢は低く

未来に理想を抱いて明るく積極的に行動していくことが、仕事や人生をより良くするための第一歩です。どんな逆境にあっても、どんなに辛くても、常に明るい気持ちで「理想は高く」もち続け、努力を重ねてきた結果が、本校の伝統を支えています。

自分の能力やわずかな成功を鼻にかけ、傲慢になるようなことがあると、周囲の人たちの協力が得られないばかりか、自分自身の成長の妨げにもなるのです。教職員集団が良い雰囲気を保ちながら最も高い能率で学校を運営する。そのため、みんなのおかげで仕事ができるという認識のもとに、謙虚な姿勢をもち続け、常に周囲への感謝の気持ちをもちましょう。

「姿勢は低く」を旨とした、互いに信じあえる仲間として仕事を進めていくことが大切です。

2. 大地に足を踏んまえて

自分だけがよければいいと考えるのではなく、自分を犠牲にしても他の人を助けようとする利他の心で判断すると、まわりの人みんなが協力してくれます。また視野も広がるので、正しい判断ができるのです。より良い仕事をしていくためには、自分だけのことを考えて判断するのではなく、思いやりに満ちた「利他の心」に立って判断をすべきです。

教育現場では、要所要所で正しい決断をしなければなりません。その場面では勇気というものが必要となります。教育に携わるものとして自らの信念を貫きながらも、相手の成長を願うがゆえの優しさと厳しさのある決断をしていきましょう。

教育が深い愛情のもとに人を育むという土台こそが、我々が「大地」として依って立つべきものです。

3. 一歩ずつ前へ前へと進もう

私たちは教育に携わるものとして、それぞれの専門性を持っています。一つのことへの専門性は、他のあらゆることに通じバランスのとれた人間性を醸成してくれます。私たちが素晴らしい仕事をしていくためには、職業人としての専門性ととも、「この人のためなら」と思わせるような人間性を兼ね備えていなければなりません。

私たちが立命館で成し遂げようとする教育に対して、大きな夢や願望をもつことは大切なことです。しかし、大きな目標を掲げても、日々の仕事の中では、一見地味で単純と思われるようなことをしなければならないものです。素晴らしい成果を見出すまでには、日々の地味な教育活動の繰り返しがあるのです。

専門性と人間性を土台として、「一歩ずつ前へ前へと」歩みを進めることを忘れてはなりません。

4. 自由と清新

人はえてして変化を好まず、現状を守ろうとしがちです。しかし新しいことや困難なことにチャレンジせず、現状に甘んじることは、すでに退歩が始まっていることを意味します。

チャレンジというのは高い目標を設定し、現状の問題点を洗い出し常に新しいものを創り出していくことです。困難に立ち向かう勇気とどんな苦労も厭わない忍耐、努力が必要なのです。

ものごとを成し遂げていくもとは、才能や能力よりも、熱意や情熱です。失敗することに寛容である文化と、粘って粘って最後まであきらめずにやり抜く気概こそが立命館の「自由と清新」を推し進める原動力です。

5. 平和と民主主義～未来を信じ、未来に生きる～

教育という未来を描く仕事をする私たちが、なにか新しいことを成し遂げるには、まず「こうありたい」という夢と希望をもって、超楽観的に目標を設定することが何よりも大切です。

しかし、計画の段階では、「何としてもやり遂げなければならない」という強い意志をもって悲観的に構想を見つめなおし、起こりうるすべての問題を想定して対応策を慎重に考え尽くさなければなりません。

そうして実行段階においては、「必ずできる」という自信をもって、楽観的に明るく堂々と実行していくのです。

日々の判断や行為が「人として正しいものであるかどうか」を常に謙虚に厳しく反省し、自らを戒めていかなければなりません。教育に関わるものであればなおさらです。

忙しい日々をおくっている私たちは、つい自分を見失いがちですが、その中でも「未来を信じ」夢を描けるかどうか。その夢を一生かかって追いつけられるのであれば、それは生きがいとなり、人生もまた楽しいものになっていくはずですよ。

1. 理想は高く、姿勢は低く

高い目標を持つ

高い目標を設定する人には大きな成功が得られ、低い目標しかもたない人にはそれなりの結果しか得られません。自ら大きな目標を設定すれば、そこに向かってエネルギーを集中させることができ、それが成功のカギとなるのです。

生徒の成長こそが教育の価値であり、教育の成果とは生徒の内側にあるものです。我々教職員が掲げる「高い目標」の中には、いつでも一人一人の生徒が存在していなければなりません。

生徒一人一人の顔を思い浮かべながら、明るく大きな夢や目標を描いてこそ、豊かな教育が成し遂げられるのです。

つねに謙虚であれ

「先生」と呼ばれる私たちは、傲岸不遜になるようなことがあると、周囲の人たちの協力や生徒からの信頼が得られないばかりか、自分自身の成長の妨げにもなるのです。常にみんながいるから自分が存在できるという認識のもとに、謙虚な姿勢をもち続けることが大切です。

学校が人との繋がりの中で生徒を育てる場である以上、我々が謙虚に教職員や生徒たちへの感謝の気持ちをもって仕事にあたる必要があります。

率先垂範

立命館では、「教師が率先垂範をする」姿勢で子どもたちを育んできました。教師は、生徒の見本になる存在です。教師が率先垂範をして、時・場・礼を守り、人の嫌がるような仕事も真っ先に取り組んでいく姿勢を見て、生徒の姿勢も教師に倣って変わっていきます。その行動を通して周りの協力を得ることができます。

それはありとあらゆる教育活動の場面で、教員が自ら燃える姿勢を生徒に見せることで、クラス、学年、学校が一丸となり生き生きとした活動を行う事ができます。

教師が生徒に見せる姿は、教師が生徒に望む姿でなければいけません。日々、教員同士が笑顔でコミュニケーションを取り、協力して仕事に向かっている姿を見て、生徒も安心して学校生活を送ることができます。

2. 大地に足を踏んまえて

命を立つる所以

立命館の「立命」は「身を修めて以て之れを俟（ま）つは、命を立つる所以（ゆえん）なり」から採ったもので、「生きている間はわが身の修養（勉強）に努めて天命を待つのが人間の本分を全うすることなのである」という考えです。

生徒も教職員も皆、自らをつねに謙虚に見つめ、自身の修養に勤める場たるのが立命館の本義なのです。

ですから私たち教職員が学び続け、日々の教育を更新していくそんな学び舎こそが立命館なのです。

もうダメだというときが仕事のはじまり

教職員は、授業、生活指導、保護者対応、校務分掌、部活動、行事、学校運営など様々な業務を抱えています。その中で、もうダメだと思う瞬間があるかもしれません。

しかしながら立命館をこれまで支えてきた教職員の方々は「すばらしい仕事を成し遂げるには、燃えるような熱意、情熱をもって最後まであきらめずに粘り抜くこと」を信じてきました。本当に相手を突き動かすような仕事は、熱意や情熱によるもので、もうダメだ、というときこそが本当の仕事のはじまりなのです。

真の勇氣は場数を経験して身に付く

真の勇氣とは、自らの信念を貫きながらも、節度があり、怖さを知った人、つまりビビリをもった人が場数を踏むことによって身につけたものでなければなりません。

立命館の教職員は、「生徒のために」を第一にあらゆる修羅場（環境と状況）を乗り越えてきました。どれだけ怖くても、どれだけ逃げ出したくても、「生徒のために」を第一に向き合ってきた教育活動が今の立命館を支えているのです。

場数を踏んで得た“真の勇氣”こそが、生徒および同僚の救いとなる一手を考える事ができる土台となっているのです。

生徒の変化を見落とさない

私たちはどんなときでも、どんな環境でも、どんなささいなことであっても気を込めて取り組まなければなりません。授業の中での生徒の小さな反応、休み時間の些細な表情の変化、どんなときでも「気を込めて」注意深く観察する習慣をつけなければいけません。

こうした、気を込めた注意こそが生徒理解を助け、いざという時の判断を左右します。

3. 一歩ずつ前へ前へと進もう

ベクトルを合わせる

人間にはそれぞれさまざまな考え方があります。もし教職員一人一人がバラバラな考え方に従って行動したらどうなるでしょうか。

それぞれの人の力の方向（ベクトル）がそろわなければ力は分散してしまい、学校全体としての力とはなりません。全員が勝利に向かって心をつにしているチームと、各人が「個人タイトル」という目標にしか向いていないチームとでは、力の差は歴然としています。

わたしたち教職員は、立命館の教育を担うものとして原理原則につねに立ち返って、力を合わせていかなければなりません。

わたしたちの力が同じ方向を向いていけば、何倍もの力となって立命館の教育力が発揮されるはずです。

地味な教育活動を積み重ねる

日々の教育活動は一見地味で目に見える成果が得られるものではありません。日々の小さな子どもたちとの関わり、毎日の授業。小さな小さな毎日の実践こそが、私たちの教育の根幹です。ときには「大きな教育目標と現実の間には大きな隔りがある」と感じて思い悩むことがあるかもしれません。

しかし、偉大なことは最初からできるのではなく、地味な努力の一步一步の積み重ねがあっけがはじめてできるということを忘れてはなりません。今日という日の私たちの教育実践の積み重ねが、卒業式での子どもたちの成長した姿、10年後に社会で輝いている子どもたちに繋がっていることを信じて、教壇に向かっていきましょう。

生徒たちと共に歩む

教師として「生徒と信頼関係を築く」ことは大切な第一歩です。お互いに感謝と誠意を持って心を通わせることで、より豊かな人間関係を築くことができます。

信頼関係を築くための第一歩は、「生徒と向き合い、生徒と共に歩む」ことを重ねることです。日々の声掛けや何気ない会話、思い悩む生徒との面談、保護者との連携。こうした小さな積み重ね、繰り返しの上に信頼関係があるのです。

そうした信頼関係の上に行う教育実践はよりしなやかで力強いものとなっていくはずです。

感動を創出する

生徒が入学するその日から卒業する最後の日まで、数えきれない程の出来事があるはずです。嬉しい事もあれば、苦しい事も多々あるはずです。しかし、それが生徒の成長する材料になるのは、「心が揺れる」感動があるからです。日々の教育実践、生徒との信頼関係の上に感動を創出すれば、それは教職員にとっても生徒にとってもかけがえのない瞬間となるはずです。卒業式の日の生徒ひとりひとりの胸に、そんな思い出が詰まっている学校でありたいと強く願っています。

4. 自由と清新

独創性を重んじる

立命館は、教職員ひとりひとりの独創性を重んじ、人の模倣ではなく、真の人間性を兼ね備えた教育力で勝負してきました。他校で例のない教育実践を、教職員・生徒が必死の努力でこれをつくり上げ、蓄積してきました。

教職員の自由で豊かな発想を重視し、「やってみたい」を「何としてもやろう」という強い使命感にまで昇華させる。毎日毎日創意工夫を重ね、たくさんの人を巻き込んでいく。その一步一步の積み重ねが、やがてすばらしい教育実践の創造へとつながっていくのです。

周りを巻き込む仕事をする

仕事は自分一人ではできません。周囲にいる人々と一緒に協力しあって行うのが仕事です。その場合には、必ず自分から積極的に仕事を求めて働きかけ、周囲にいる人々が自然に協力してくれるような状態にしていかなければなりません。たくさんの人を巻き込んで仕事をする中で、自分も周囲の人も学び合い、高め合い、より大きな仕事ができるようになっていくものです。

5. 平和と民主主義～未来を信じ、未来に生きる～

心にいつも太陽を

生徒たちが羽ばたく社会が理不尽な暴力によって日常が脅かされることがないこと。平和という光の中に生徒たちが飛び込んでいくこと。生徒たちが築き上げる社会が、一人ひとりがより一層輝く民主的な場であること。

そのために、私たちがこの立命館という学校の中で実現したいことは、今日という一日を生徒たちと過ごし、生徒たちに未来を切り拓く力を育むことに他なりません。